十九世紀ドイツ心理学と西田幾多郎の『善の研究』

満原　健

序

本稿では、『善の研究』（一九一一年出版）が十九世紀ドイツ心理学の影響下で成立したということを明らかにする。西田は一九〇七年に鈴木大拙にあてた手紙で、次のように語っている。「之から又一つ思想を練磨して見たいと思って居る、できるならば何か一冊の著作にして見たいと思う、これまでの哲学は多く論理の上に立てられたる者であるが余は心理の上に立て見たいと思う」(19-107)。西田はこの手紙で明白に、論理ではなく心理にもとづいて自分の哲学を構築したいという自分の構想を語っている。現に、西田の処女作となった『善の研究』では、ヴント、スタウト、ジェームズという三人の心理学者にたびたび言及がなされているほか、「純粋経験に関する断章」と題されている草稿では、エビングハウスやミュンスターベルク、ツィーエンといった心理学者の著作も参照されている。他のどの思想も、これほどまでに手掛かりとはされていない。『善の研究』という書物には多様な思想が流れ込んでいることがこれまでの研究で明らかにされてきたが、[1] そのうちで『善の研究』執筆時期の西田にとって特に重要な思索の源泉になっていたのは心理学である、ということは間違いないと言えるのである。

このように心理学が手掛かりとされていた理由として、当時の時代状況を挙げることが出来る。以下で述べるよ

うに、十九世紀はドイツで科学的心理学が勃興した時期であり、この最新の心理学には哲学者も大きな関心を寄せていた。また西田が帝国大学に入学した一八九一年の頃には、このドイツの科学的心理学が日本でも頻繁に紹介されていた。ドイツだけではなく日本でも、科学的心理学が脚光を浴びていたのである。このような時代に大学で哲学を学んだ西田が、哲学を「心理の上に立て見たい」と考えて『善の研究』を執筆したのは自然なことだったと考えられる。

しかし、西田はのちに『善の研究』について、「今日から見れば、此書の立場は意識の立場であり、心理主義的とも考えられるであろう。然非難せられても致方はない」(1-3) と自己批判を行っている。哲学を「心理の上に立て見たい」という構想の過ちを認め、自分の哲学的立場を変えていくのである。

そのため、西田の思想上の立場の変化を追う際、『善の研究』が心理学から影響を受けているという点は重要であると考えられる。それにもかかわらず、『善の研究』と心理学との連関がこれまでの研究で明らかにされているとは言いがたい。西田とジェームズの純粋経験論について比較検討する作業はすでに行われているが、[2] 十九世紀のドイツの心理学と西田の思想との連関については比較検討されたことはほとんどない。[3] 現在ではその結果として、『善の研究』の純粋経験論がもつ心理主義的性格が明らかにされていないだけでなく、この著作と当時の欧米の思潮との同時代性が見過ごされてしまっている。

以上の理由で、本論文では十九世紀ドイツ心理学から『善の研究』への影響を論じる。まず第一節で十九世紀ドイツ心理学の状況を概観し、そののちに第二節でヴントに言及する。ヴントを扱うのは、第二章で問題とする『善の研究』の心理主義的性格がヴントの心理学に由来すると考えられるからである。

一　十九世紀ドイツの心理学

アリストテレスの『魂について』、ロックの『人間知性論』、ヒュームの『人間本性論』などの著作が示すように、心理学という学問は哲学の一部門とされ、哲学者によって研究されてきた。それが十九世紀になると、ドイツで心理学を自然科学化する試みが始まる。L. SprungとS. Sprungによる整理に従えば、主要なものに限定しても、十九世紀のドイツ心理学は七つに分類できる。[4] 第一にヘルバルト（Johann Friedrich Herbart, 1776–1841）とベネケ（Friedrich Eduard Beneke, 1798–1854）の心理学は内的経験の物理学という性格をもち、次にランゲ（Friedrich Albert Lange, 1828–1875）らものは客観的心理学と特徴づけできる。三つめはJ・P・ミュラー（Johannes Peter Müller, 1801–1858）、ロッツェ（Rudolf Hermann Lotze, 1817–1881）、ヘルムホルツ（Hermann von Helmholtz, 1821–1894）を代表とする心の生理学としての心理学であり、またヴェーバー（Ernst Heinrich Weber, 1795–1878）、フェヒナー（Gustav Theodor Fechner, 1801–1887）らは精神物理学的な心理学を研究していた。他にヴント（Wilhelm Maximilian Wundt, 1832–1920）やロッツェらは実験心理学と非実験心理学の双方を含む二元的な心理学の研究を、さらにフェヒナー、エビングハウス（Hermann Ebbinghaus, 1850–1909）、G・E・ミュラー（Georg Ellias Müller, 1850–1934）、シュトゥンプフ（Carl Stumpf, 1848–1936）らは高次の心的過程の精神物理学としての心理学の研究を行っていた。そして最後に、プライヤー（William Preyer, 1841–1897）、W・シュテルン（William Stern, 1871–1938）、C.シュテルン（Clara Stern, 1878–1945）を代表的な人物として展開された一般発達心理学がある。[5]

これらの人物のうち、心理学を科学化しようとした最初の研究者はヘルバルトであり、その構想は、一八二四年に第一巻が出版された『科学としての心理学　経験と形而上学、数学に新しく基づいて』（*Psychologie als Wissenschaft, neu gegründet auf Erfahrung, Metaphysik und Mathematik*）という著作で示されている。ヘルバルトは扱う対象

の違いという観点から、外的経験の全体を概念的に理解させるのが自然哲学の義務であるのに対し、「内的経験の全体を概念的に理解させる」[6]のが心理学であると定義をし、自然哲学と心理学は異なるものであると述べる。その一方でヘルバルトは、方法論という観点からは両者は完全に異なるものではなく、自然研究の方法をある程度心理学に援用すること、つまり「自然研究と同様の心の研究を導きよせる」[7]ことができると言う。詳しく言うと、自然科学だけでなく心理学も、現象の連関に完全な規則性があることを前提した上で、量に言及し、計算をすることによって、この規則性ある現象の連関を探究できるとヘルバルトは主張するのである。

このような発想のもとで、この『科学としての心理学　経験と形而上学、数学に新しく基づいて』という著作では、ヘルバルトが精神の静力学と精神の動力学と呼ぶものについての研究がすすめられている。ヘルバルトは、複数の表象の間には抑制（Hemmung）という力が働いており、ある表象が意識に浮かび上がり明瞭になるという変化、あるいは不明瞭になって意識から消えていくという変化は、この抑制という力が働く結果であると考えた。精神の動力学とは、この抑制という力がもたらす表象の明瞭化や不明瞭化の速度を研究する部門であり、精神の静力学では、この力が均衡状態になったときのそれぞれの表象の明瞭さ、強さを研究する[8]。どちらの部門でも、抑制という力の量を数値化し、力の関係を数式化する。そのことによってヘルバルトは、内的に経験されるものがどのような数学的法則に支配されているかを示そうとしたのである。

ヘルバルトはこのように数学を持ち込むことで心理学を科学化しようとしたのだが、生理学的前提を心理学に持ち込もうとはしなかった。精神が身体に依存していることがありえても、神経系が精神状態を生み出すという事態があまりに不可思議なため、また心の内的な形成については心理学から理解するしかないため、精神の状態や活動を説明するのに生理学的前提は必要ないと考えたのである[9]。

これに対して、生理学を用いることで心理学を科学化しようとする研究者もいた。この方面、すなわち生理学的

心理学の代表的な著作はロッツェの『医学的心理学あるいは心の生理学』(*Medicinische Psychologie oder Physiologie der Seele*, 1852年)である。ロッツェは、物質や自分の身体に生じることのすべてを精神状態の質と完全に同等視することはできないと断りつつも、我々の精神状態の変化が、外界から受ける印象と我々の身体との物理的な相互作用に依存していることを認める。[10] 我々の心の状態が全面的に物質に依存しているとは考え難く、したがって「心的生活全般についての教説を自然科学に作り替えるべきという要求は空虚な流行でしかない」[11]ものの、心の状態が部分的には物質に依存している以上、心理学が「自然科学の協力を必要とする」[12]こと、つまり心理学にとって生理学が必要になることは認めざるを得ないと言うのである。

心理学にとって生理学的研究が必要ないとヘルバルトが主張したのは、神経系が精神状態を生み出すという事態が説明困難なためであった。ロッツェも、物質的な刺激が始まることでどのようにして心的状態が生まれるという結果になるのか説明することはできないと述べている。しかし、どの外的な刺激が実際にどの内的状態と一般的法則的に連鎖しているのか、内的な出来事と外的な出来事との組み合わせからどのようにして身体と心との相互作用[13]の全体、つまり生理学的な心的生活が生じるのか、という問題には答えられる可能性があるとロッツェは言う。そのためロッツェにとって心理学とは、身体の物質的な側面を扱う生理学的な研究を排除するようなものではなく、むしろ「物質の運動状態から、この状態とは同等視できない心の内的状態を説明すること、また逆に心の内的状態から物質の運動状態を説明すること」[14]を課題とするものであった。

そして、ヘルバルトのような数学的心理学ともロッツェに代表される生理学的心理学とも異なるものとして心理学の科学化に重要な貢献をしたのが、フェヒナーの精神物理学である。精神物理学をフェヒナーは「体と心との、より一般的には物体世界と精神世界、物的世界と心的世界との関数的関係もしくは依存関係についての精密な教説」[15]と定義し、この分野での先駆的業績として、ヴェーバーの論文「触覚と一般感覚」を引用している。[16] そこでヴェー

バーは、自分が行った実験にもとづいて、筋肉の緊張によって二つの重さの違いを感じ取れるには、一方の重さがもう一方よりもおよそ四十分の一重い必要がある、ということを主張している。[17] たとえば二十グラムのものと二十一グラムのものを手に持って比べた場合、二十分の一の違いがあるため重さに違いがあると気付くことができる。だが一〇〇グラムのものと一〇一グラムのものでは、同じく一グラムの違いであっても、比率から見れば百分の一しか違いがないので、手に持って比べても重さの違いには気が付かない。このように、二つの重さの違いを感じ取れるかどうかは、両者の差によって決まるのではなく、比によって決まる、ということをヴェーバーは実験によって見出した。このように両者の差ではなく比によって決まるという点は、重さの違いだけではなく、視覚によって見出される直線の長さの違い、聴覚によって見出される音の高さの違いが感じ取れるかどうかにもあてはまる。二つの刺激の違いを感じ取れるかどうかは、一方の刺激と、二つの刺激との比によって決まるのである。[18] これをフェヒナーはヴェーバーの法則とよび、この法則をもとに、感覚の大きさは刺激の大きさの対数に比例するという法則、つまり感覚の大きさが二倍、三倍…になるとき刺激の大きさはx^2倍、x^3倍、…になる、というフェヒナーの法則を導き出した。[19] このようにしてフェヒナーは、刺激の大きさという物的なものと感覚の大きさという心的なものとの関係を、法則として、実験によって裏付けつつ、数学を用いて定式化していったのである。

さらに、ヴントがフェヒナーのこの精神物理学の方向性を受け継いで、実験を心理学の方法として採用し、[20] 一八七九年ライプツィヒ大学に実験心理学研究所／実験心理学科（Institut für experimentelle Psychologie）を設立する。[21] これによって、哲学の一部門として研究されてきた心理学が、科学的心理学として哲学から独立していく。

ドイツだけでなく、アメリカではヴントらから影響を受けたジェームズが科学的心理学を広めていた。日本でも、一八八八年に出版された『哲学会雑誌』[22] 第二冊第十九号でヴントの実験心理学研究所が紹介されており、[23] またジェームズに学んだホール（Granville Stanley Hall, 1846-1924）のもとに留学した元良勇次郎が、1888年から帝国大

学で精神物理学の講義を始めていた。この時期の状況を澤柳政太郎はこう語っている。

現時哲学に関する著書雑誌に登ること最も多く世人の注意を惹起すること最も大に又最も活発の運動をなすものは科学的心理学即新心理学なり。之に反して哲学は近来寂として声なく恰も其領分は新心理学の為に奪われたるが如く漸く学者の攷究に遠り著書雑誌に登らず気息奄々として全く新心理学と反対の状勢を示せり。例令えば欧米の哲学雑誌に顕るる所の論説報道を視るも殆ど新心理学に関せざるものならざるものはなく又現に我哲学会雑誌に於て報道する所の如きも主として新心理学に係れり。[24]

ここでは、「現時哲学に関する著書雑誌に登ること最も多く世人の注意を惹起すること最も大に又最も活発の運動をなすものは科学的心理学即新心理学なり」と科学的心理学が活況を呈していたことが語られ、欧米の哲学雑誌に載っている論文のほとんどが科学的心理学に関するものだと述べられている。この澤柳の叙述には誇張のきらいがあるが、心理学に言及した哲学論文がこの時期に多く出されていたことは事実のようである。『体系哲学論叢』第一巻に付されている英独仏の文献リストによれば、一八九四年には一、二九八本の哲学文献が発表されており、そのうち心理学部門に属するのは三三六本ある。[25] 心理学だけで哲学全体の四分の一以上を占めており、論理学部門に属するのは四十三本、認識論が六十四本、形而上学が十三本しかないことを考えると、心理学は哲学のうちで実際にかなり盛んであったと言えるだろう。

日本の状況に関しては、当時の代表的な哲学の雑誌であった『哲学会雑誌』の第一冊から第五冊まで（一八八七年から一八九二年まで）を見ると、計一七〇本掲載されている論説のうち心理学に関するものは十三本、[26] 実験心理学の由来となった精神物理学に関するものが十二本ある。[27] また無記名の「批評紹介」「雑録」と分類された短い報

告では、「ライプツィヒの心理試験室」（第二冊批評紹介）や「ヴント氏の試験」（第二冊批評紹介）など実験心理学についての記事のほか、「比較心理学の新著」（第三冊雑録）などの報告もある。当時のこの『哲学会雑誌』が西洋哲学だけでなく中国哲学やインド哲学も扱っており、さらに倫理学、論理学、社会学についての論稿も多く載せていることからすれば、心理学という分野は確かに研究対象として人気があったと言えるだろう。

西田が帝国大学に入学したのは、まさにこの時期、一八九一年のことであった。西田は元良の心理学講義も受講しており、間違いなく、哲学のなかで心理学が注目を浴びた時期を生きていた。哲学を「心理の上に立てみたい」という西田の発想は、この時代状況からすれば、ごく自然なことだったと言える。

現にドイツでも、心理学の科学化という時代の潮流の影響を受けて、哲学の基礎は心理学にあると主張する哲学者が現れていた。たとえばベネケである。[28] ベネケは、「真の学問／科学は、知覚と、比較と相互作業によって知覚から獲得された経験以外の何物に基づくこともほぼ不可能である」[29]という発想から、哲学もまた知覚や経験に基づくべきだと考えていた。もちろん知覚によって獲得されるのは現象にすぎず、そのため知覚が哲学の基礎となるとは考えられない、と反論することもできる。だがベネケは、外的知覚と異なり内的知覚であれば、事物を現象としてではなく、直接に事物それ自身のままに把握することが可能で、[30] そのため哲学は、内的知覚を基礎とすることができると考えた。そしてこの内的知覚について研究できるのは心理学であるため、[31] ベネケは心理学が哲学全体の基礎学問であると主張するのである。[32]

心理学が哲学の基礎であるというこのベネケの主張と心理の上に哲学を立てるという西田の構想には親近性がある。しかし西田はベネケの哲学をほとんど参照しておらず、むしろ当時の科学的心理学の代表的人物であったヴントから学んでいる。西田がそこから吸収したと考えられるのは、直接経験という概念と見方の違いという発想、そして程度の差という考えである。

二　ヴントと西田

二―一　直接経験という概念

ヴントの『哲学体系』(*System der Philosophie*, 1889年）では、直接経験という概念が次のように定義されている。

思惟機能のあらゆる影響に先行する経験、したがって思惟という徴表から完全に切り離された認識の概念を直接経験と言い表す。直接経験に対立するのは間接経験であり、それは思惟機能の影響によって、つまり思惟機能を用いてなされた概念形成によって、なんらかのかたちで変化した経験である。(33)

ここでは直接経験に、二つの定義が与えられている。一つは、「思惟機能のあらゆる影響に先行する経験」というものである。ヴントの考えでは、思惟は統一されているものを二つの概念に分解する機能と、別の表象を統合し一つのものとする機能をもつ。たとえば「空が青い」という命題は、「空」と「青い」という別々の概念を結びつけることで生まれるのではなく、青い空の直観が思惟の分解する力を呼び起こし、直観では結びついていたものが二つの概念へ分離されることで生まれる。思惟によって複数の概念が結びつき統一されている命題でも、思惟によって二つの概念に分解されることで、その二つの概念の関係が明示される。また思惟は、こうして切り離された概念をほかの概念と統合し関係づけることができる、とヴントは言う。(34)

ヴントの言う直接経験は、このような分解と統一という思惟の機能によって変化をする以前の経験のことを指す。このような直接経験の例としてヴントは、意志や知覚された客観、それらの関係などを挙げている。主観と客観を区別する立場であれば、意志は主観側に属し知覚されたものは客観側に属するが、主観と客観どちら側に属す

るものであっても、また主観と客観との関係も、思惟による変化がなされる前であれば、直接経験の内容と言えるのである。

先の引用で直接経験は、「思惟という徴表から完全に切り離された認識の概念」とも定義されている。この引用にある思惟という概念と認識という概念は、ヴントの考えに従えば、二つの点で異なる。まず、思惟される表象は必ずしも現実と関係しなくともよいが、認識の表象は現実と一致していなければならない。主観と客観という言葉を用いるなら、思惟という主観的活動と客観である現実は一致していなくともよいが、認識という主観的活動は客観と一致している。その意味で認識は「思想内容の現実の確信と結びついた思惟」[35]である。また、「思惟ではなく認識が先行する」[36]という点で思惟と認識は異なる。ヴントは、我々が思惟しているものはすでにはじめから現実であり、後から思惟と現実とが切り離され乖離したものとして捉えられる、と主張する。「思惟と存在との統一ははじめに与えられていた」[37]のであって、両者は、統一されていたものを二つの概念に分解する思惟が働いてから、二つのものとして理解される。はじめの段階では、思惟という主観的活動は客観的現実と一致し統一状態にあるため、認識が成立しているのである。

直接経験が思惟ではなく認識であるというこの第二の定義からは、二つの意味を取り出せる。第一に、直接に経験されるのは現実であり、直接経験の状態では主観と客観が一致し統一されている。第二に、この主観と客観との統一状態としての直接経験は思惟に先行しており、のちに思惟によって二つの別々のものとして把握される。直接経験は、主観と客観が統一状態にある、思惟に先行する経験のことと規定されているのである。

このような『哲学体系』での直接経験の二つの定義を整理すると、ヴントの言う直接経験は、まずもって思惟による変化を受けていない経験のことを指すと言える。ここでの思惟は、複数の表象を関係づけて一つの表象とする統一機能と、一つに統一されているものを二つの概念に分解する機能をもつ。この思惟による統一と分解以前の段

階である直接経験では、「青い空」のように直観されたものが統一状態にあるだけではなく、思惟という主観的活動と客観的現実が一致するため、主観と客観も統一状態にあり、従って認識が成立していると言える。

以上見てきたこのヴントの直接経験と、西田の直接経験あるいは純粋経験との共通点は、ごく容易に指摘できる。『善の研究』の冒頭で西田は次のように述べている。

> 経験するというのは事実其儘に知るの意である。全く自己の細工を棄てて、事実に従うて知るのである。純粋というのは、普通に経験といって居る者も其実は何等かの思想を交えて居るから、毫も思慮分別を加えない、真に経験其儘の状態をいうのである。例えば、色を見、音を聞く刹那、未だ之が外物の作用であるとか、我が之を感じて居るとかいうような考のないのみならず、此色、此音は何であるという判断すら加わらない前をいうのである。それで純粋経験は直接経験と同一である。自己の意識状態を直下に経験した時、未だ主もなく客もない、知識と其対象とが全く合一して居る。これが経験の最醇なるものである。(1-9)

西田の言う純粋経験は、まず「事実そのままに知る」ことであって、ヴントが定義する認識と同様に、そこでの経験内容は現実と常に一致している。つまり「知識と其対象とが全く合一して居る」。また純粋経験は「毫も思慮分別を加えない」、「考のない」、「判断すら加わらない」前の経験そのままの状態であると述べられており、ここで純粋経験は、思惟に先行し、主観と客観が統一されている経験として規定されていると言える。

この思惟という概念についても、西田はヴントと類似した見解を提示している。西田は「思惟及び想像は物及自己の凡てに関する観念に対する統一作用」(1-86)と思惟が統一作用であることを認めつつ、こうも述べている。

思惟というのは心理学から見れば、表象間の関係を定め之を統一する作用である。その最も単一なる形は判断であって、即ち二つの表象の関係を定め、之を結合するのである。併し我々は判断に於て二つの独立なる表象を結合するのではなく、反って或一つの全き表象を分析するのである。例えば「馬が走る」という判断は、「走る馬」という一表象を分析して生ずるのである。それで、判断の背後にはいつでも純粋経験がある。判断に於て主客両表象の結合は、実に之に由りてできるのである。(1-16)

ここで西田は、判断という形で思惟が働くとき、二つの独立した表象を結合統一するのではなく一つの表象を分析しているということを主張している。「走る馬」の例で言えば、それぞれ別に表象された「馬」と「走る」とを結合統一して「馬が走る」という判断が生じるのではない。純粋経験の状態で表象された「走る馬」をもとに、この表象を分析して「馬」と「走る」という二つの表象に区別することで「馬が走る」という判断が成立すると西田は言うのである。

すでに触れたようにヴントは、「空が青い」のような知覚についての命題は、「空」と「青い」という別々の概念を結びつけることで生まれるのではなく、むしろ青い空の直観が思惟の分解する力を呼び起こし、この力が直観では結びついていた二つの概念を分離することで生まれる、と述べていた。判断は思惟が表象を分析することで成立するという西田の主張は、ヴントのこの主張と同内容だと解釈できる。具体例は挙げられていないものの、思惟は観念の統一作用であるという西田の見解も、思惟によって複数の表象あるいは概念が結合統一されるというヴントの理解と同じであると考えられる。そのため、西田とヴントは共に、一つの表象を分解する機能と複数の表象を統一する機能の双方をもつことを認めていると言えるのである。

このことは、二つの機能をもつ思惟に先行し、しかも主観と客観が統一されている状態の経験という点で、西田

の純粋経験とヴントの直接経験が同一の経験を指し示しているということを意味する。しかし、西田が「純粋経験の直接にして純粋なる所以は、…具体的なる意識の厳密なる統一にある。意識は…元来一の体系を成したものである」(1-11)と、純粋経験は意識が統一状態にある経験のことだという定義を導入することで、両者に違いが生まれる。

西田において、一つの表象を分解する機能に着目したとき、思惟は統一状態にある純粋経験を分析し、判断を生むものであるため、純粋経験は思惟に先行していると言える。この点はヴントの直接経験にもあてはまる。しかし西田の場合、複数の表象を結合統一する機能に着目したとき、思惟はむしろ統一状態にある新たな純粋経験が生まれる契機となっており、この点で西田の純粋経験とヴントの直接経験とは異なるものとなっている。

> 意識は元来一の体系である、自ら己を発展完成するのがその自然の状態である、而もその発展の行路に於て種々なる体系の矛盾衝突が起ってくる、反省的思惟はこの場合に現われるものである。併し一面より見て斯の如く矛盾衝突するものも、他面より見れば直に一層大なる体系的端緒である。換言すれば大なる統一の未完の状態とも言うべきものである。…此の矛盾衝突の裏面には暗に統一の可能を意味して居るのであって、決意或は解決の時已に大なる統一の端緒が成立するのである。(1-21)

西田によれば、思惟は意識に矛盾衝突が起こり、統一が破れたときに現われる。しかし、それは「大なる統一の未完の状態」であり、「純粋経験の統一」へと自らを発展完成させる端緒という性格をもつ。ここでは思惟は、複数のものを統一する作用として、新たな純粋経験の統一をもたらす契機として機能する。直接経験は思惟に先行するという定義は、この場面には当てはまらないのである。

さらに西田は、「実在は一に統一せられて居ると共に対立を含んで居らねばならぬ」(1-63) と考える。統一されたものには、必ずそれに対立するものがある。しかし、二つの物が対立するには、その両者が独立したものではなく、すでに統一されている必要があり、「即ち一の実在の分化発展でなければならぬ」(同) とされる。経験が不統一の状態にあるときも、分裂しているものはそれぞれ独立した経験ではなく、あくまで一つの経験の内部での不統一にすぎない。ある統一された経験は、そのうちに分裂を含みながら、他の経験とも対立しつつ、しかしより大きな経験の一部となっていると言える。そのため西田によれば、経験には無数の統一と不統一の段階がある。不統一の状態にある経験も純粋経験の一部であって、そのため思惟が働いているときも、経験は広い意味では純粋なままと理解されている。ヴントの直接経験にこのような含意はない。この点で、ヴントの直接経験と西田の純粋経験は明確に異なったものとなっているのである。

二―二　見方の違いという発想

すでに見たように、直接経験が思惟による主客の分解以前の段階であるという点では、ヴントと西田は一致していた。この直接経験という概念のほかに、見方の違いという発想も、ヴントから受け継がれていると解釈することができる。

『心理学綱要』(*Grundriss der Psychologie,* 1896年) でヴントは、心理学は魂についての学問であるという考えを、心理学に固有の方法が導入され形而上学から独立するようになったという理由で退ける。また外的に経験され知覚されるものは自然科学の対象であり内的に経験され知覚されるものが心理学の対象であるという、扱う対象の違いにもとづいた従来の区別も、外的経験の対象と全く異なる対象を扱うかのような誤解を与えてしまうという理由で不適当とみなす。ヴントによれば、これらの定義ではなく、間接経験の立場が自然科学的立場であり、直接経

験の立場が心理学的立場であるという見方の違いにもとづいた定義の方が適切である。自然科学も心理学も同じ経験を扱うのだが、自然科学の立場では、経験に含まれる主観的要素を抽象して経験内容の客観的要素を扱い、また仮説的な補助概念を用いることで、経験内容の客観的要素を間接的概念的に認識する。それに対し心理学の立場では、経験のうちの主観的要素を抽象することはなく、経験の全体を完全に現実的な状態で扱い、直接的直観的に経験を認識するからである。[38] そしてヴントは、哲学のような精神科学は、主観的要素を抽象した経験内容ではなく、主観的要素を含めた現実の成立要素を扱うので、経験全体を扱う心理学を基礎とする、と言う。[39]

この『心理学綱要』での主張には、西田の以下の考えとの近さが見て取れる。

> 実在は唯一つあるのみであって、其見方の異なるに由りて種々の形を呈するのである。自然といえば全然我々の主観より独立した客観的実在であると考えられて居る。併し厳密に言えば、斯の如き自然は抽象的概念であって決して真の実在ではない。自然の本体はやはり未だ主客の分れざる直接経験の事実であるのである。…唯我々が此具体的実在より姑く主観的活動の方面を除去して考えた時は、純客観的自然であるかの様に考えられるのである。(1-67)

つまり、直接経験あるいは純粋経験としての実在は、見方によってさまざまに捉えられる。自然と通常呼ばれているものは、この主観的要素を取り除くという見方で純粋経験を見たものであって、純粋経験から独立した客観的実在ではない、直接経験の立場からみれば主観と客観は分かれていないと西田は言う。この主張は、自然科学と心理学は同一の経験を対象とするが、経験から主観的要素を抽象する立場であるという点で自然科学は心理学と異なっているというヴントの見解と、同質のものであると言えるのである。

二―三　程度の差という発想

西田の言う「程度の差」(1-14, 53, 86) という発想も、ヴントに由来すると考えられる。ヴントは『心理学綱要』で、感覚のような心的要素は常に性質と強度（Intensität）をもって与えられると言う。強度は感覚の強さのことであり、この強度の大きさは強度の程度（Intensitätsgrad）と名づけられている。[40]

西田は第四高等学校教諭時代の心理学講義のために書かれたと推測されるノートでは、[41] このヴントの考えをもとに、感覚の属性に性質、強度（intensity）、空間的属性、時間的属性があり、強度は感覚の強弱の度のことを意味すると書き記している。[42]

同時期に書かれた推測されるノートには、知覚的直覚と反省的直覚との違いは「程度の差で性質の差でない」(16-41) と述べられている。ここで西田が主張しようとしているのは、どちらの直覚も複雑で構成されたものであり、この点において両者に性質の差はない、ただその複雑さに程度の差があるということであって、ヴントの言う心的要素が与えられるときの強度の差、あるいは強度の程度の差とは意味が異なっている。しかし、知覚的直覚と反省的直覚が「程度の差で性質の差でない」と言われ、また意志と想像も「程度の差であって性質の差ではない」(1-86) と述べられているように、西田は性質の差との対として程度の差という概念を用いている。この点に着目するなら、性質と強度という二つの対からヴントが心的要素を規定しようとしたこと、また西田の心理学講義用のノートで空間と時間という対の他に性質と強度を対としていることとの共通性が見て取れる。西田は、ヴントの強度あるいは強度の程度という対の他に性質と強度を対としていることとの共通性が見て取れる。西田は、ヴントの強度あるいは強度の程度という概念を拡大して、程度という概念を導入したと考えられるのである。

結

以上述べてきたように、数学を導入することで心理学を科学化しようとしたヘルバルト、生理学を持ち込むこと

で同じく心理学を科学化しようとしたロッツェ、実験という手法を取り込んだヴェーバーやフェヒナー、ヴントの功績があって、十九世紀のドイツでは科学的心理学に大きな関心が寄せられるようになっていた。西田が大学で哲学を学んだ一八九〇年代にはすでに日本にもこの科学的心理学が紹介されており、ドイツと同じく日本でも科学的心理学が着目される時代となっていた。哲学を「心理の上に立て見たい」という構想のもと執筆された『善の研究』は、このような時代精神のなかで生まれたのである。『善の研究』は日本人が日本で書いた著作でありながら、当時の欧米の思潮の中で生まれた、欧米との同時代性をもった著作であったと言うことができる。

実際に、『善の研究』はこの科学心理学の代表者であるヴントから三つの点で影響を受けていたと言える。直接経験という概念と、見方の違い、程度の差という発想である。思惟による変化を被る以前の直接経験は、ヴントにとっては現実と一致した認識であり、常に真である。西田にとっても純粋経験は「知識と其対象が全く合一している」(I-9) 状態の経験であり、そこでは真実の認識が成立している。この点で西田とヴントは共通している。また直接経験あるいは純粋経験としての実在は見方の違いによってさまざまに捉えられるという点でも両者は共通しており、性質の差に対する程度の差という概念を用いて説明を試みている点でも共通している。これらの共通点を、西田は科学的心理学の代表的研究者であるヴントから受け継いだと考えられるのである。

もちろんヴントとの相違点もある。ヴントと異なり純粋経験は意識が統一状態にある経験のことだという定義を導入することで、西田の議論では思惟が新たな純粋経験の統一をもたらす契機となっている。また、経験には無数の統一と不統一の段階があるとされ、不統一の状態にある経験も純粋経験の一部であって、思惟が働いているときも、経験は広い意味では純粋なままと理解されている。これらの思想により、西田の『善の研究』は、当時の欧米の思潮の中にありながら、独自の位置を占めるものとなっているのである。

凡例

西田幾多郎の文章の引用は『西田幾多郎全集』（岩波書店、二〇〇二―二〇〇九年）より行い、（巻号-ページ数）の形で略記する。

注

（1）　たとえば、陽明学からの影響を指摘したものとして、呉光輝「西田哲学の東洋的性格―陽明学受容の問題を中心に」（『日本の哲学』第一号、昭和堂、二〇〇〇年）が挙げられる。宋学からの影響については井上克人『西田幾多郎と明治の精神』（関西大学出版部、二〇一一年）、第三章と第四章。仏教からの影響について論じられているのは渡部清「仏教哲学としての西田哲学―『善の研究』を基礎として」（『哲学紀要』第三十二号、二〇〇六年）、同「「西田哲学」の真景」（『日本の哲学』第八号、昭和堂、二〇〇七年）。仏教のうち禅との連関について述べられているものとしては、西谷啓治「西田哲学―哲学史におけるその位置―」（『西谷啓治著作集』第九巻、創文社、一九八七年）。上田閑照「禅と宗教哲学」（『宗教研究』第七十八巻第四号、二〇〇五年）。ジェームズとの関係について論じたものとしては、アンドリュー・フィーンバーグ（有坂陽子訳）「西田とジェームズの純粋経験論」（大峯顕編『西田哲学を学ぶ人のために』、世界思想社、一九六六年）、伊藤邦武「ジェイムズと西田幾多郎―その経験概念をめぐって」（『日本の哲学』第七号、昭和堂、二〇〇六年）。ヘーゲルとの比較がなされているものとしては、藤田正勝「西田幾多郎とヘーゲル」（上田閑照編『没後五十年記念論文集西田哲学』、創文社、一九九四年）。同「西田幾多郎『善の研究』とヘーゲル『精神現象学』」（『叢書ドイツ観念論との対話』第六巻、ミネルヴァ書房、一九九四年）。井上哲次郎からの影響について論じたものとして、板橋勇仁『西田哲学の論理と方法』（法政大学出版局、二〇〇四年）、第一章。

（2）　注（1）、フィーンバーグ論文、伊藤論文を参照。

（3）　上掲西谷の論文、井上の著作では心理学からの影響があると述べられている。しかしドイツ心理学に立ち入って言及した論文は、管見のかぎりでは、中嶋優太「西田「倫理学草稿第一」における意志の自由とキャラクター」（『『善の研究』の百年』、京都大学学術出版会、二〇一一年）と氣多雅子「〈名著再考〉西田幾多郎『善の研究』―純粋経験は心理主義的か―」（『思想』二〇一五年第十一号、第一〇九九号、岩波書店、二〇一五年）のみ。

（4）　Vgl. Sprung, L./Sprung, H.: „Rückblicke auf ein schwieriges Jahrhundert – Zur Geschichte der Psychologie im 20.Jahrhundert in

Deutschland“, in: W. Hacker, /M. Rinck. (Hg.), *Zukunft gestalten. Bericht über den 41. Kongreß der Deutschen Gesellschaft für Psychologie in Dresden 1998*. Lengerich 1999. S. 128f.

（5） 準分類として、ショーペンハウアー、ニーチェ、フッサールらによる生の哲学的な心理学、フロイト、ユング、アドラーによる深層心理学、ブレンター、シュトゥンプフ、マイノングらによる全体論的な心理学、ディルタイやヤスパースらの解釈学的心理学、W・シュテルンによる差異心理学が挙げられている。

（6） Herbart, Johann Friedrich: *Lehrbuch zur Psychologie. Sämmtliche Werke*. 5. Bd., Leipzig 1850. S. 6.

（7） Herbart, Johann Friedrich: *Psychologie als Wissenschaft, neu gegründet auf Erfahrung, Metaphysik und Mathematik. Sämmtliche Werke*. 5. Bd., Leipzig 1850. S. 198.

（8） Vgl. Ebd. S. 325.

（9） Vgl. Herbart, Johann Friedrich: *Lehrbuch zur Psychologie. Sämmtliche Werke*. 5. Bd., Leipzig 1850. S. 112f, 116.

（10） Vgl. Lotze, Rudolph Hermann: *Medicinische Psychologie oder Physiologie der Seele*. Leipzig 1852. S. 11.

（11） Ebd. S. 32.

（12） Ebd.

（13） Ebd. S. 77f.

（14） Ebd. S. 76.

（15） Fechner, Gustav Theodor: *Elemente der Psychophysik. Erster Teil*. Leipzig 1860. S. 8.

（16） Vgl. Ebd. S. 136f.

（17） Vgl. Weber, Ernst Heinrich: „Der Tastsinn und das Gemeingefühl“, in: Rudolph Wagner. (Hg.), *Handwörterbuch der Physiologie mit Rücksicht auf physiologische Pathologie*. 3. Bd. 2. Abt. Braunschweig 1846. S. 559.

（18） Vgl. Fechner, Gustav Theodor: *Elemente der Psychophysik. Erster Teil*. Leipzig 1860. S. 134.

（19） Vgl. Fechner, Gustav Theodor: *Elemente der Psychophysik. Zweiter Teil*. Leipzig 1860. S. 13.

（20） Vgl. Wundt, Wilhelm: *Grundzüge der Physiologischen Psychologie*. Leipzig 1874. S. 3.

(21) 大学から正式に学科として承認されたのは一八八三年。二番目の心理学科は、G.E.ミュラーによって一八八七年にゲッティンゲン大学に建てられた。

(22) 『哲学会雑誌』は、現在は『哲学雑誌』と名を変えて刊行が続けられている。

(23) 無記名の雑録「ライプツィヒの試験心理室」(『哲学会雑誌』第二冊第十九号、一八八八年、四一一-四一五ページ)参照。

(24) 澤柳政太郎「新心理学と哲学」(『哲学会雑誌』第二冊第二十三号、一八八八年)、六四〇ページ。旧漢字・旧仮名遣いは現代のものに改めた。

(25) Vgl. *Archiv für systematische Philosophie*. Bd.1. 1895 Berlin. S. 521-565.

(26) 第一冊に清野勉「心理的現象の連合」が三本、第二冊には同著者による「心理的現象の連合(承前)」が二本、ユーリングス・ジャクソン「洒落心理」が一本、澤柳政太郎「新心理と哲学」が二本、元良勇次郎「心理学と社会学の関係」が一本。第三冊には澤柳「新心理と哲学(承前)」が二本、第五冊には元良勇次郎「勢力保存法と心の関係」、大西祝「心理説明(未完)」それぞれ一本が掲載されている。第四冊には心理学関連の論文は発表されていない。

(27) 第三冊に元良勇次郎「精神物理学」が六本、同「精神物理学(承前)」が第四冊に五本、第五冊に一本掲載されている。

(28) フリース(Fries, Jakob Friedrich, 1773-1843)も哲学を心理学に基礎づけようとした哲学者だが、心理学の科学化という情勢に影響を受けてはいないと考えられる。

(29) Beneke, Friedrich Eduard: *Erfahrungsseelenlehre als Grundlage alles Wissens in ihren Hauptzügen dargestellt*. Berlin 1820. S. 7.

(30) Vgl. Beneke, Friedrich Eduard: *Die neue Psychologie. Erläuternde Aufsätze zur zweiten Auflage meines Lehrbuches der Psychologie als Naturwissenschaft*. Berlin 1845. S. 53.

(31) Beneke, Friedrich Eduard: *Lehrbuch der Psychologie als Naturwissenschaft*. Berlin 1845. S. 1.

(32) Beneke, Friedrich Eduard: *Die neue Psychologie. Erläuternde Aufsätze zur zweiten Auflage meines Lehrbuches der Psychologie als Naturwissenschaft*. Berlin 1845. S. 51.

(33) Wundt, Wilhelm: *System der Philosophie*. 2. umgearbeitete Aufl. Leipzig 1897. S. 85.

(34) Vgl. Ebd. S. 40.

(35) Vgl. Ebd. S. 86.
(36) Vgl. Ebd. S. 87.
(37) Vgl. Ebd. S. 89.
(38) Vgl. Wundt, Wilhelm: *Grundriss der Psychologie*. 2.Aufl. Leipzig 1897. S. 3, 6.
(39) Vgl. Ebd. S. 4.
(40) Vgl. Ebd. S. 35, 36.
(41) 西田幾多郎全集第十四巻（岩波書店、二〇〇四年）、六三四ページ参照。
(42) 同上、四九二ページ参照。

（筆者　みつはら・たけし　京都大学大学院文学研究科非常勤講師／日本哲学史）

German psychology in the 19th century and Nishida Kitaro's *An Inquiry into the Good*

by

MITSUHARA TAKESHI

Lecturer (Part-time)
Graduate School of Letters
Kyoto University

In this paper I discuss the influence of German psychology in the 19th century on Nishida's maiden work, *An Inquiry into the Good*.

A movement to turn the psychology into a natural scientific enterprise began in Germany in the 19th century: Herbart tried to show that inner experience obeys mathematical laws. Lotze introduced physiology into psychological research. Weber and Fechner mathematically formulated the relationship between the size of the stimuli and that of the sense as a law based on experiments. And Wundt founded the Institute for Experimental Psychology in Leipzig University in 1879.

When Nishida began his study in Imperial University in 1891, this German natural scientific psychology was often reported in Japan. Accordingly it was natural that he made a plan to introduce the results of the newest psychology in those days into his philosophy.

The German psychologist who had the greatest influence on Nishida was Wundt. The key concept of *An Inquiry into the Good*, pure experience, which stands for the state before the change by the thinking and the recognition corresponding with the reality comes from Wundt's concept of direct experience. Nishida adopted furthermore Wundt's idea that nature is an abstracted form of pure or direct experience. In addition, he accepted Wundt's concept of the difference of degree.

However, unlike Wundt, Nishida defined pure experience as the state of the unity of consciousness. As a result he came to think that thinking is a moment which brings about a new pure experience and that the experience in the middle of the thinking is also pure in the broader sense. *An Inquiry into the Good* is, therefore, a unique work written under the influence of the 19th century German trend of thought.